◉韓国政府は22名の留学生らを全員即時釈放せよ！
◉日本政府は22名の留学生らの人権回復に努力せよ！

11.22通信

1979年 2月17日
第15号
1部100円＋カンパ
年6回発行
振替口座
大阪4649・摂津富田教会

発行所
「11・22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」
大阪府高槻市富田町3－7－25
摂津富田教会（〒569）
電話 0726－96－2562

更に救援のうねりを！

最後に対政府交渉 12・14

昨年十二月十四日、前年に引き続き二度目の対政府交渉が東京を舞台に集中的に展開された。

四年目に入った留学生らを取り戻す救援運動はこの日本において最も緊要な焦眉の課題となり、広範な闘争態勢が取り組まれる橋頭堡が各地で構築されている。

しかし、他方韓国内の状況は日増しに悪化の一途をたどっている。処刑への恫喝、転向強要や待遇悪化に加えて、最近では健康状態が憂慮される拘束者も続出している。いまや「11・22救援運動」は一瞬間の気の弛みも許されない。留学生ら全員が、この日本の地を踏むまで共に絶えざる闘いを！

人権擁護局との集団交渉

昨年十二月十四日、関西主動の対政府交渉が敢然と実行に移され、去る十一月二十二日の各要請項目の具体的な解答を要求し多大な成果を収めた。

この行動は、関西の「十一月十二月行動関西実行委員会」（代表桑原重夫氏）「全国会議」「家族僑胞の会」の三者共催で取り組まれた。

関西では前日の十三日の夜、大阪北区のPLP会館で結団式をすませ約一〇〇名が上京した。

明くる十四日午前に、まず議員会館で在京の救援会員ら約五十名を加えて前段集会を開いた。

【法務省・人権擁護局】

その後直ちに人権擁護局との集団交渉に臨んだ。

救援会側は在日韓国人「政治犯」の不当な人権侵害の実態を指摘し早急な対策と行動を要請した。

これに対して「人権擁護局」は「政治犯」の事実認識すらアイマイで「国情の違いがあり、現実的に難しい」と、関与したくないという姿勢がアリアリ。

これには何のための人権擁護局かと参加者から失笑が洩れた。

この後代表団が、内閣、外務省を訪ずれ要請行動を分散して行った。

【内閣】

代表団が国松内閣官房秘書官と会見し、「死刑執行阻止」等の要望書を提出し善処を要求した。

国松秘書官は、関係各省と連絡し「できるだけのことはしたい」と答えた。

【外務省】

柳沢アジア局長が交渉に臨んだ。基本的見解として「人権・人道上の問題として〝政治犯〟には特別の関心があり、韓国側にも繰り返し口頭で要望してきた。今後も継続してアプローチしたい」と述べた。

そして、先の十一月二十二日の解答としては、(1)徐勝氏への薬はできるだけ速やかに届けるようにしたい。(2)在日韓国人「政治犯」の名簿作成をすすめているが約三十四名ほどいる。公式発表は困難だが非公式なら（閲覧に）応じてもよい。(3)白氏の胸のマークや康氏の手錠の件、等の個々の「政治犯」の処遇調査は難しい。(4)（韓国政府への要請文は）公式文書を出すのは内政干渉の可能性がある、等。

総じて外務省の対応は、国会質疑などの大臣答弁よりも著しく後退している感を否めない。

【法務省・入管局】

冒頭に法務省の伊藤官房審議官が、今回の交渉前に局会議を持ち先の『〝政治犯〟ら全員の再入国と在留権（協定永住権）の無条件認容』は「現行法の枠内では無理であるとの結論に達した」と述べた。そして、(1)（韓国政府の）パスポート発給があれば入国は認めるがそれは新規入国扱いとなる。(2)協定永住権の復権は、韓国内で無罪判決が出た時認めるがそれ以外は特別在留許可の更新を重ね、一般永住に近づけたい、等。

これらの解答は、ほぼ最終結論といいながら、韓国内の事件デッチ上げを結果的には追認する姿勢を打ち出していることを救援会筋では見落してはならない。

今回の交渉で一定の成果を得ただけに今後の継続した広範な対応が望まれよう。

◇ ◇

これら一連の対政府交渉の合間をぬって各代表団は三宅衆議院副議長や社会党議員控室を訪れ、「政治犯」問題への協力と支援を要請した。

◇ ◇

この後、午後には三宅坂の社会福祉会館から日比谷公園までデモ行進を行い、途中外務省前で立ち止まり、シュプレヒコールをくり返した。

また、午後六時から今回の対政府交渉の最後のしめくくりとして文京区の全逓会館で約二〇〇人が結集し、報告と総括集会を開いた。挨拶に立った土井たか子代議士は「内政干渉一点張りの政府を突き崩すには皆さんの力強い支援がなければならない。私も頑張るつもりです。」と決意表明を行った。

〝パンフ〟
・対政府交渉記録集・
・B5判60P
・予価 400円
編集 関西実行委員会
◉近く刊行予定

三宅衆議院副議長（中央）に要請する桑原事務局長

留学生らの処遇 年初より悪化へ

韓国内五ケ所の拘置所・矯導所に収監されている留学生らへの日本人救援会員からの差し入れが、拒否されるケースが最近相次ぎ、救援会筋では深刻な波紋を巻き起こしている。

従来から面会は至難であっても差し入れだけは割合認められていた。

しかし、昨年十月初旬ソウル拘置所で、「外国人の領置金差し入れは厳禁」という措置が一方的にとられ、更にはこの年末、年初に渡韓した「11・22救」や「各個別救」会員らの話を総合すると、地方の矯導所も一斉に「差し入れは直系親族に限る」と拒絶する方向を打ち出し、「承服できない」とする会員らと各所で小ぜり合いが起きている。

これには、救援運動が一向に衰えず増々高揚を示していることから、「救援会」と「拘束者」との分断を策謀する当局が、刑務所側に差し入れ規制の示達を出したのではとの観測が有力である。

この差し入れ禁止には、刑務所側も明らかに戸惑いの表情で、当局と会員との板バサミに、「郵送なら認める」とこっそり会員に耳打ちする職員もあり、今回の措置もそう長続きしないのではとの楽観的な見方もある。

渡韓・差し入れは、「11・22救援会」が本人支援の唯一の方策として最重要視してきたものであり、また、頻繁に渡韓できない家族の肩代りとして差し入れを続けてきた「個別救援会」もあることから、今回のこの事態が長引くようなら、大々的な対抗手段も考慮せざるをえないであろう。

金元重氏面会

友人の手紙は禁止

金元重氏

昨年十二月二十六日、「金元重君を救援する同窓生友人の会」の会員が大田矯導所で金元重氏との面会に成功した。

金元重氏は青い綿入れの上下服で現われ、顔色は血色がなく今一つ優れなかった様子であったが、「一日三十分の運動と乾布摩擦は励行している。部屋の水はまだ凍らない」と気丈な面持を示した。

また、「手紙は全然着かない」と不満を洩らした。

この後、会員は大田の他の拘束者と帰途立ち寄ったソウル拘置所の死刑囚に差し入れを試みたが、いずれも拒否されている。

白氏のオモニ死去

ソウルへの念い空しく―

白玉光氏の母親（オモニ）金小福南さんが去る二月九日午後七時頃神戸市内の病院で食道癌のため死去された。享年六十六才。

葬儀は同十一日、大阪東成区の自宅で家族・救援関係者ら多数が見守るなかしめやかに営まれた。

オモニは白氏の逮捕後、心労で固形物が全く喉を通らないにもかかわらず気力だけで単身ソウルを十数回足繁く往来し、わが子の消息を追い求めていた。

昨年末に「冬仕度に行かねば」といい続ける中突然倒れ神戸大医学部付属病院で入院加療中であったが、既に癌細胞は全身に転移し手術も適わぬ状態であった。

そしてオモニは、「春になれば光（みっ）ちゃん（白氏の愛称）に会えるのネ」を繰り返す中遂に不帰の人となった。

オモニの回復のため、各救援会各界に献血を呼びかけるなど奔走してきた「白玉光氏を救う大阪の会」ではこの突然の悲報にショックを受けている。

なお従来から白氏との面会はオモニだけ唯一認められていたため、今後白氏への実質救援の立ち遅れが生じるのではと同会では深く憂慮している。

◇ ◇

おわび

去る二月一日、大阪吹田のコンサート会場で金小福南オモニのため緊急の献血を呼びかけたところ多数の人から自発的に申し出て頂きまことに感謝にたえません。

しかし、この度のオモニの突然の訃報で結果的に皆さまのご厚意をいかすことができませんでした。

謹んで深謝申し上げます。

・白玉光氏を救う大阪の会
・白玉光・許景朝両氏を救う大阪大学の会

李秀熙氏 光州に下獄

「11・22救援会」の調査によると「11・22」事件の李秀熙氏(27)＝堺市在住＝は、昨年十二月二十七日付けで韓国最南端の光州矯導所に下獄したことが判明した。

李氏は「11・22事件」で逮捕されたにもかかわらずその消息が全く知られていなかったが、昨年二月突然懲役七年の刑でソウル拘置所に在監している事実が明らかになっていた。

これまで他の有期刑の拘束者が判決確定後旬日を経ずして各矯導所に分散下獄されたのに、彼のみ今回の下獄に至るまで約一年八カ月ソウル拘置所で留まっていたことは奇異だと救援関係者は指摘している。

断鎖

毎日新聞の前田特派員がソウルから追放された。暮れの大統領就任式の記事が当局のお気に召さなかったのが理由らしいが、実際は最近つとに『政府批判』のボルテージを増している日本人特派員団への見せしめ的色彩が濃厚である。★ここでは余り伝えられることのない特派員の取材譚を紹介しよう。現在、ソウルには約十人の日本人特派員がいる。AP、UPIは韓国人記者を配置しているので、外国人特派員とは文字通り日本人だけなのである。それだけに全国内が言論統制下にある韓国では、これら特派員の世界に真実を伝えるという責務は大きい。勿論、御多聞にもれず取材には種々の制限や妨害が伴う。電話盗聴、尾行、監視、通信物の開封などは日常茶飯事である。少しでも批判記事が載ると即公報部に呼び出されたり、間接的に韓国人の助手や取材対象者を連行、殴打拷問などの圧力も珍しくない。また卑劣なことに、特派員の私生活のアラ探しなどもする。これは脅迫や威嚇の種になる★ソウルの記者クラブを訪ねたある救援会員は、記者が本国への電話送稿中、音声が何度も中断するのを目撃したり、彼との会話で筆談を要求されたりで、こんなにひどいのかと面喰ったそうだ。数カ国の特派員生活を経験したある記者は「資本主義国家を標榜する国では最も酷い」と述懐している★彼ら特派員を保護すべき日本外務省の弱腰も指摘されよう。出先き大使館の不甲斐なさは、米大使館のそれといつも好対照でお笑い草にもならない★毎日の追放後、軌を一にして残留特派員の筆調が一斉に鈍った。当局の思うツボではないか。「官製のご用記事しか送れないのなら特派員の総引き揚げを考慮すべきだ」とあるジャーナリストの痛烈な言葉もある★しかし当局と特派員との事実報道をめぐる熾烈な闘いは当分続くとしても、韓国の津々浦々から洩れるあの民主化を希求する怨嗟の声は誰かが受けとめねばならぬ。

きけ！魂（ソウル）の叫び

＝李哲氏支援全国縦断コンサート＝

2・1吹田コンサート

「李哲氏を救う会全国連」（事務局熊本市）が、李哲氏救援を更に広範な層にまで拡めようと計画した全国縦断フォークコンサートが各地で、成功を収めている。まずトップをきって昨年十二月五日熊本市の図書館ホールで開かれ約五〇〇人の聴衆が、プロ歌手の三上寛さん、高田渡さん小林隆二郎さんらの熱っぽい歌と李哲氏救援の訴えにしばし耳を傾けた。熊本コンサートは開始前になって手違いでアンプがないことがわかり、救援会員が徹夜で探すというハプニングもあったが、「仏教青年会」の会員らの献身的助力もあり、熊本市の救援集会ではこれまでの最高の人数が参加した。

関係者はこの救援行動を積み重ねて李哲氏救援の大きなうねりにしたいと意気込んでいる。

九州公演はその後、六日に李哲氏の生家のある人吉市で四〇〇人、七日の福岡と八日の宮崎は各々三五〇人が参加した。

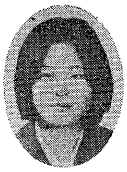
関西では去る二月一日、大阪吹田市民会館で「李哲氏を救う大阪の会」主催で開かれ約一〇〇〇人の救援会員や市民、フォーク愛好家が集まり救援運動の地道な浸透ぶりを地域でも確実に示した。

「きけ、魂（ソウル）の叫び」をメインテーマにしたコンサートは、中山ラビさん洪栄雄さんらの素晴しい歌声と「李哲・白玉光両氏を救え」との唱和がうまく呼応し、立錐の余地もないほど詰めかけた参加者に深い感銘を与えた。

なおこのコンサートには、地元の吹田に学舎のある「白玉光・許景朝両氏を救う阪大の会」も共催に回った。

病棟に移さる

〈金五子さん　金鍾太氏〉健康悪化！


金五子さん

大邱矯導所に収監されている金五子さん（28）＝無期懲役＝が約一ヵ月間病棟で療養していたことが判明した。

金五子さんは長期間の拘禁生活で過労が重なり、食事が摂れない状態に陥り、昨年十二月中頃それまでの雑居房から病棟に移された。

さいわい年初より快方に向い一月中旬に本人の希望もあり転房。去る一月下旬に大邱矯導所を訪ずれた「金五子さんを救う会」の会員は、「友人との面会や書簡の交換を禁止するという非人道的な処遇が彼女の病気を誘引させた」と指摘し、その改善を強く要望した。

同救援会では、金五子さんの健康状態を憂慮し今後も引き続き注視したいと言っている。

なお金五子さんは、現在病後の静養のため、作業から外され、独房に入れられている。

◇　◇

全州矯導所の金鍾太氏（28）＝懲役十年＝も昨年十二月から病棟に移されている。金鍾太氏は昨夏の異常な暑さに身心とも極度に疲弊していた。

八月末の会員との面会では、再三病舎への転房を願っていると語っていたが（本通信13号参照）、それがやっと認められた形となった。

同氏も長期の拘束で身体全体が衰弱し、病棟に変ってからも容易に回復せず、また寒気のため余病の神経痛やリューマチも併発し、現在でも安静を続けている。

抗議する救援会員ら

梁、趙両氏を救え！

去る二月八日に梁南国氏（懲役十年）、趙得勲氏（懲役七年）の判決確定二周年を抗議するデモが大阪韓国領事館に向けて行われた。

当日、両氏の救援会が中心になり宣伝カーやビラ入れなどの取り組み後、心斎橋筋プラザービル前に約八十名が結集した。

デモ隊は領事館前で警察の理不尽な規制で抗議文を読み上げることはできなかったが、本年初の救援行動に少なからぬ成功を収めた。

両氏の救援会では、抗議文を韓国政府、法務部に送付すると言っている。

差し入れも拒絶

渡韓報告　11・22救援会（上）

一月十日。

渡韓も度重なると慣れで余裕がでてくるものだ。

しかし、金浦空港の税関を通過するあの緊張感は、何度経験しても嫌なものだ。山のような下着類の口実を何にしようかと、出発前から考えていたが、逆に向うが答えを出してくれた。

「この下着は商売のサンプルか」、これには思わず「そうだ」とほくそえんだ。

しかしその後が悪かった。こっそり持ち込もうとした「11・22通信」が露見したのだ。二人前の旅行者がやはり「文芸春秋」を取り上げられていたので、ままよと少し粘ったところ、職員が三人も出てきてちょっとした騒動になりそうな気配だったので、慌てて引き退った。ソウル特派員が欲しがっていた「通信」は別なルートでも入るが、入国を拒否されては元も子もないので。

例年より暖冬とはいえ日本とは格段の寒気の中、まずソウル拘置所に向う。

昨年から厳しくなっているとの情報で緊張したが、差し入れは案外スムーズに運んだ。白玉光、康宗憲、李哲氏らに下着、靴下、手袋、食料品等を入れた。が、やはり領置金は駄目みたい。下着や靴下を入れる時、順番待ちの他の人々が、僕の品物をさかんに〝偵察〟にくる。韓国語入門コースの僕には、その時の彼らの発言が全て理解できたわけではないが、これ位は分かった。

「これは上等だ」「温かそうだ」「どこで手に入れた」。羨望の的だった。

崔哲教、陳斗鉉、姜宇奎の諸氏にも、食料品等を約八千ウオン分入れた。

ホテルに行く途中で、日本語の分かる韓国人と偶然知り合った。彼はかなり反体制的で、僕の渡韓目的を告げると、「彼らは今の政権が倒れたら、直ぐに釈放される。それまで頑張れ」と、こちらがびっくりするようなことを平気で語ってくれた。また「今の韓国は貧富の差が激し過ぎる。政権が特恵層に加担しているからだ」とも述べた。僕が日本人だということで安心したのかも知れない。

十一日。

朝一番にソウルを発ち、大田矯導所にやってきた。刑務所にしてはここの白亜のような立派な塀は不釣合いだ。

11・22の全員に差し入れようと窓口で申請すると、それには答えず、暫くして二階の一室に通された。

副所長、教務課長、係員と三人が待ち構えていた。これは異例のことだ。課長面会を要求しても仲々実現しないのに、副所長まで待機しているとは…。

こちらも身構えながら、いつもながら丁々発止（ちょうちょうはっし）の遣り取りが始まる。言葉は丁寧だが、尋問調である。

曰く、「何のため来た」「本人とどういう関係か」、また「面会は駄目」とも。

「では差し入れだけでも」と低姿勢で要望すると、「家族、親族以外は駄目だ」とのご託宣。

こちらも負けていない。今迄の例を話し、「（拒否の）根拠を具体的に示せ」と喰い下った。

一時間ほど押し問答をしたが、結局ラチがあかなかった。最後に向うもネをあげたのか、「郵送なら受け取ってやる」と漏らしてくれた。

その時、副所長が、「これから他の矯導所にも行くのか」と、こちら側の行動を見透したかのような発言をした。「いや、行く予定はない」と、ドギマギして慌てて打ち消したのだが……。

全州行きのバス停では切符がなく、やむなくダフ屋の切符を倍の値段で買わされた。この手の商売が流行っているみたい。一カ所しか廻っていないのに、すっかり疲れてしまった。

全州には夜やっと到着する。

十二日。

早朝、矯導所に行く。

昨日の失敗が杞憂の種だが、ここはいまだかって一度も差し入れが断わられた例がないので安心する。事実、差し入れ窓口で、金鍾太氏と姜鍾健氏に下着、本、お金、卵や菓子類など、どっさり差し入れた。

手続きが40分程で終ったので帰ろうとすると、不意に英語で呼び止められた。職員ではなく、スーツをリュウと着こなしていた三十五、六の男だ。「昔皮ジャン、今三ツ揃え」という言葉が連想され、反射的にKCIAかも知れない、と思った。こちらが遠慮するのもものかは、庶二無二、課長室に連れて行かれた。

身上調査から始まり、雑談が延々と続いた。「北のトンネル」「韓国は反共国家」「アムネスティーは左翼に利用されている」等。こちらも時間があれば付き合ってあげたいのだが、何しろ今日は大邱まで行かねばならないので、いい加減閉口していた。課長はその内カメラを取り出し、「君と国際的友人になりたい」と、パチリ、パチリ。愛想笑いをして、諦めて撮される。

その時、別な係官が入ってきた。その係官の持っている荷物を見て、一瞬顔から血の気が失せるような心地になった。先刻の差し入れの物品だったのだ。不覚だった。向うはこれを揃える時間稼ぎをしていたのだ。

今度は僕も一転して大声で反撃を開始した。向うも翻って、引き止めから追い出し策に転じた。「差し入れを受け取ってくれなければ、ここから動かん」と、悲壮な覚悟で遣りあった。

どれ位の時間が経過したのだろうか。気がつくと、部屋には血相を変えた職員らが五、六人もたむろしていた。無言の圧迫を受けている感じであった。

万事休すと、涙を呑んで悄然と荷物を抱え立ち去ろうとしたところ、課長が「日本からわざわざ来て頂いたのに申し訳ない。郵送なら何とかしよう」と言うのを、返事もせず廊下に出た。

今度は待機していた職員が、カメラでまたパチリ、パチリと。抵抗する気力も起らなかった。

例のKCIAとおぼしき男が、門の外まで追いてきた。上手くない英語で頻りに「気分を悪くしないで欲しい」を繰り返していた。

タクシーに乗り込む前、もう一度矯導所を望んだ。あの壁の向うに友人がいる。ほんの僅か手を伸ばした所に彼らは存在している。しかし、何と遠い距離なのだろうと思う。不意に自分の不甲斐なさが力の無さが無性に口惜しくなってきた。（第十六号につづく）

渡韓カンパを！

清州保安監護所

徐俊植氏移監

転向強要熾烈に

昨年五月二十七日、在日韓国人政治犯では初めて「社会安全法」を適用された徐俊植氏（30）は、昨年十一月十五日付けで大田矯導所から新たに設立された忠清北道の清州保安監護所に移監された。

これまでの〝代用保安監護所〟と異なり、さらに非人道的な転向強要が徐氏の肉体と精神を責め苛むのではと関係筋では憂慮している。

昨年末、在京の救援会員が日本人としては初めて清州保安監護所を訪ずれ、保安監護課長（新役職か？）と面談した。

課長の話しによると、徐氏は床はビニールタイルでその上に厚手のむしろが敷かれた六畳の部屋に四人で収容され、読書は比較的自由であるとのことだ。また会員の「釈放の時期は」との問いに「二年後の八〇年五月二十七日の時点で本人の状況を勘案して判断したい」と、事実上永久拘束も辞さないとの強硬な方針を示した。

解説

保安監護所は、社会安全法による保安処分のうちもっとも厳しい保安監護となった政治囚を入れる特別収容所。社会安全法の施行後、大田その他の矯導所が、保安監護所として代用されていたが、それでは「保安監護処分は、懲役刑とかわりない」ため、当局は、別に保安監護所を設けることにしていた。それが、今回徐俊植氏が移監された清州保安監護所である。

当局は、「保安処分は刑罰ではないから、処遇は一般の囚人より良い」といっているそうだが、むしろ逆に「非転向」の政治囚・思想囚だけを収容することになるため、処遇はかえって悪くなるのではないかと思われる。

すなわち、保安監護所長は『被保安監護者の動態・健康状態・思想転向したか否か、その他の参考事項』を厳しく監察しなければならないからと「思想転向」の度合いに応じて処遇が左右されることになるだろうからだ。

現在、清州の保安監護所には、一説では五〇〇名以上の政治囚が投獄されているといわれる。そもそも社会安全法の対象者数、被処分者数すら極秘事項になっているため明らかにはなっていない。当局側からすれば、永久に抹殺してしまいたい「非転向」政治囚を閉じこめるための保安監護所は、もっとも暗い闇の中に置いておかねばならないものなのだ。

保安監護所に収容されている政治囚が受ける精神的苦痛は、肉体的な苦痛とともに、想像に絶するものであろう。もともと不当な刑期を終えたにもかかわらず、釈放どころか拘禁状態を続けられ、その上、無期にわたる拘禁を強いられるのである。社会安全法、なかんずく保安監護処分こそ韓国における人権侵害の極限状況を示すものである。

これに対する関心はきわめて低いといわねばならない。韓国内では、多くの人々が、保安監護、住居制限、保護観察の処分を受けているが、その実態を明らかにしたり、それを批判したりすることは、困難かつ危険なこととなっている。

社会安全法の問題を注視することは、徐俊植氏そして来年以降に刑期満了を迎える在日韓国人政治犯の釈放を実現するため、救援運動・日韓連帯運動にとって不可欠の課題である。（M・S）

救援会短信

◎ 三月中旬過ぎに「11・22救援会」主催の大バザーを開く予定です。ついては、出品の衣服、書籍、日用品、食料品、その他をお寄せ下さい。収益金は本年一年の渡韓差し入れ費用に充てる予定です。どうぞご協力下さい。

◎ 康宗憲氏の死刑確定二周年集会が来る三月十五日、大阪市上本町のナニワ会館で開かれます。前特派員のソウル報告などもありぜひご参加を！詳しいお問い合わせは、（〇六―七九二―六九八六の牧野さんまで、但し夜間のみ）。